

お だ う ら  
小 田 浦 窯 跡 群 1

大野城市教育委員会



天井部が残っている様子

小田浦窯跡群は牛頸と上大利を中心に形成されている牛頸窯跡群の中の小グループを指します。牛頸の中でも北西部に当たり、今は月ノ浦団地になっています。

須恵器を焼いた窯跡が14基見つかりました。6世紀後半（古墳時代）から8世紀前半（奈良時代）までのものです。この中で50-I号窯跡と名前をつけた窯跡からは裏のページの写真のように、床面から完全な形の須恵器が数多く見つかりました。これらは須恵器の古さと新しさを考える時の良い資料となりました。



図1. 須恵器の出土状況



図2. 須恵器の重なっている様子

50-1号窯跡は一部天井が残っている珍しいものですが、表のページで述べたように、数多くの完全な須恵器が見つかりました(図1)。窯の中全体ではなくて写真のように一部分で見つかりました。完全な形のものでですから取り出して使っても良さそうなのに、どうしてそのままにしたのでしょうか。

さて、図2は図1の一部分を逆に見たものです。ドラ焼きのような形をしたものやつまみの付いた蓋などがあります。これらを実測して、左半分は外面を、右半分は断面と内面を示したのが下の図3です。1と2、3と4、5と6、7と8、9と10はそれぞれ杯蓋、杯身といってセットになります。これらの中で1~4と5~10は形が違いますね。実は作られた時期が少し違うと考えられていたものです。1~4の方が少し古いと思われていました。しかし、この小田浦

50-1号窯跡ではいっしょに重なって見つかりましたから、同時に作られていたことがわかったわけです。また、1~4の須恵器は粘土で作る時に外側の一部分をヘラのようなもので削って形を整えますが、いっしょに見つかった他の須恵器の中にはヘラで削らないものもありました。このように、この窯跡の調査では今までと違ったいくつかの重要な発見がありました。

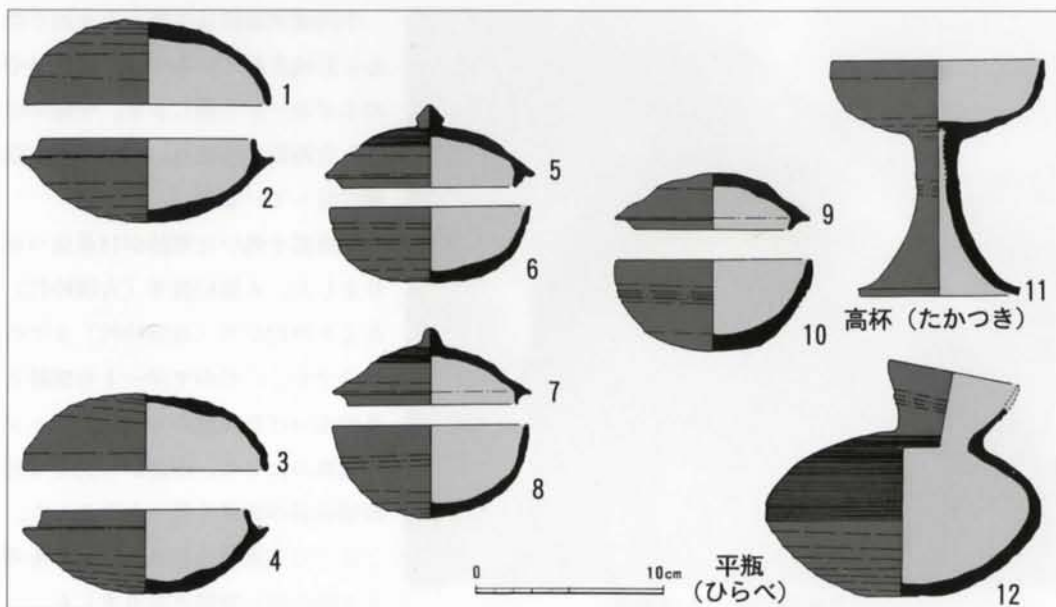


図3. 見つかった須恵器